

加治屋百合子さん (Part 1)

ヒューストンで暮らす約4,000人の日本人の中には、世界的なレベルで活躍されている方もたくさんいらっしゃいます。ガルフストリームでは、ヒューストンの在留邦人の中の日本の「宝」ともいえる方々をご紹介します。

第一回目は、ヒューストンバレエのプリンシパル(トップダンサー)である加治屋百合子さんです。現在ヒューストンバレエには、8人の日本人ダンサーが所属していますが、加治屋さんは、2014年7月にヒューストンバレエに移籍し、同年11月にプリンシパルに昇格して以来、看板ダンサーの一人として活躍されています。2021年には芸術各分野において優れた業績を挙げた人に与えられる第71回芸術選奨文部科学大臣賞*1を受賞され、日本でもますます注目を集めています。(佐藤暁子)

●バレエとの出会い・上海バレエ学校



「お忙しいところ、お時間を取っていただきありがとうございます。まずは、バレエを始めたきっかけを教えてください。」

私が通っていた幼稚園には全国大会に出場する鼓笛隊があり、指揮者に選ばれました。でも私は鼓笛隊についていたダンスチームで踊りたかったのです。それで小学校に入学した際に、家の近くのバレエ教室に母が連れて行ってくれました。ですが、初めてのレッスンでは泣いていたのを覚えています。私は鍵っ子だったので、寂しくないようにと、学校が終わった後にいろいろな習い事をやらせてもらっていました。そのひとつがバレエでした。

バレエ以外にも、お琴教室や塾などに通っていた中、10歳の時に父が仕事の関係で上海に行き、全寮制のバレエ学校があることを教えてくれて興味を持ち面接をすることになりました。でもそのときはバレエーナを目指していたわけはありませんでした。

学校の面接では、「まだ小さすぎるのでもう1年待った方がいいのではないかと当初は言われました。中国の国立バレエ学校で、スパルタ式のとても厳しいところでした。「ロシアメソッド」といって、生徒募集の時も、生徒の体型だけではなく親の体型も見て決めるなど、生徒は「選ばれしエリート」で本当に厳しい。10歳の何ん自由なく育ててきた日本人の子供が、そんな厳しい所ではもたないだろうと両親に話していたのですが、両親も「短期間でも本人がやってみようなら」ということで誰も長く続くとは考えてはおらず、入学に至りました。



—学校生活はどんなふうでしたか？

学校は全寮制で、朝の6時からストレッチが始まるような生活でした。そのころの上海はまだ発展途上で、寮の水道は蛇口からお水は出ない、電気はつかないということが多々ありました。女子寮はビルの4階で水が上がってこないで、水筒に水を汲んで4階までもっていき、歯磨き、顔洗いをしていました。その当時のトイレは流れないことも多く、ドアも壁もなく側溝みたいになっていました。

他にも私より年上の外国人留学生が数名おりましたが、留学生の多くは自国との生活のギャップがあまりにも大きく、皆さん自国が恋しくてホームシックになっていました。でも、私はまだ小さかったということもあり、同年代のクラスメイトと同じ環境にいたため、これがこの普通ののだと受け入れていました。今でしたら信じられない生活です。

寮には、学生が抜け出さないためでしょう(笑)鉄格子の門の管理があり、週末しか校外に出られませんでした。入学当時は寮には電話がなかったので、学校の向かいにあるホテルに行き、家族に電話をかけたのを覚えています。その当時、日本へのコレクトコールが1分で千円(?)くらいで、あとで莫大な請求書が来ていたと母より聞きました(笑)。そんな時代でした。学校生活も終わりになろうとする頃に、やっと寮の居室に電話が配置され、卒業間際くらいに携帯電話が出てきました。

あの頃は携帯電話がなく、通信手段として母や祖父母にたくさん手紙を書いていました。それが一番の楽しみで、母も私も当時の手紙は全て大切な記憶、宝物として保管しております。中国では日本語を話す機会があまりありませんでしたので、手紙のおかげで日本語を保つこともできていたと思います。

母には一番寂しい思いをさせたのかなと思います。中国にいた時が私の一番の成長期だったので、「百合ちゃんは、ママの知らないところで大きくなったね…」とあとで言われました。中国に留学して1ヶ月後くらいに、寮のドアをノックする音がして、開けたら母がいました。「百合ちゃん、そんなに頑張らなくていいよ」って、飛行機のチケットも持っていました。上海の生活が厳しいことや、私がバレエーナを目指していたわけでもなかったのを知っていたので、「もう帰ろう」って私を迎えに来たのです。

でもその時は、子供心に「始めたことをこんなにすぐにやめてしまっはけないのではないかと、今帰ったら自分に負けてしまう」という負けず嫌いな私が、

「残りたい」と母に言ったのです。母は、「あの時はすごくショックだった、寂しかった」と後で聞きました。

—授業は中国語ですね。中国語は...?

北京語(マンダリン)はマンツーマンで教えていただき、留学して3ヶ月経った頃には、話していることが分かるようになっていました。名前は中国語読みで“バイフーツー”と呼ばれて、日本語より中国語の方が上手く話せていました。ですが、アメリカに来てからは話す機会があまりなく、アメリカにあるチャイナタウンでも広東語を話す方が多いので、会話をする機会はあまりないですね。



中国語の発音は難しいですが、私は子供のころに覚えたのでアクセントに苦労することなく話せるようになり、中国人と会話をしていても、私が日本人だとは誰も分からない様です(笑)。

—中国人のクラスメイトの様子はいかがでしたか？

今は違いますが、あの当時は、中国人の生徒は国から選ばれた先鋭揃いで、親御さんは先生に「とにかく叱って、うちの子を一人前にしてください」と強い姿勢でお願いしていました。国から選ばれた学生は、学費も食費も免除、それに中国のバレエダンサーとしての仕事も将来約束されているというエリートコースであるためです。

ですが学生の半分以上のクラスメイトは、自分の意思ではなく選ばれたからやっているという感じでした。当時のクラスメイトは15人おりましたが、現役でバレエダンサーとして今でも踊っているのは、私を含めて2人になってしまいました。

—さっき体型の話が出ましたが...

クラスメイトのみんなは、何千人の中からも選ばれて入学してきているので、生まれつきバレエ体型の人たちばかりでした。バレエでは足の甲が出ている方がきれいなのですが、私は全くそうではなかったで、足の甲が綺麗に見えるように毎日、毎日、鍛錬により矯正して、甲が出るようになりました。

—大変なことばかり！よく続けましたね。

国立学校なので先生も国から派遣されていて、一人でも優秀な中国人のダンサーを育てないと、先生としての資質を問われてしまいます。私は留学生なので、他の中国人の生徒と同じような指導を受けることは出来ませんでした。そのため、当時は自分が『日本人の加治屋百合子さんである』ということがとても嫌で、中国人になりたいとずっと思っていました。…みんなと同じように先生に見てほしいという気持ちでいっぱいでした。

最初のころは「一番下手なのは百合子さんだ」「一番醜いのは百合子さんだ」と言われていたのが、「だっけど一番努力してる」と先生に努力を認められて、「ああ、そうなんだ。じゃあもっと頑張らなくちゃ」と、叩かれても言われたことをバネにして頑張りを変えていました。ほんとにバレエに純粋でした(笑)。

初年度は、踊ることより手の位置や柔軟性などの基礎の練習ばかりでした。でもあの時、基礎を叩き込まれたことが今の私の土台になっています。

13歳の頃、中国の国内コンクールに私のクラスからも出ることが決まり、コンクールに向けた練習が始まりました。コンクールでは、一人ソロを踊るのですが、今までの基礎に「踊る」「舞う」が加わったことで、私はバレエが好きになっていきました。また、練習をすればするだけ自分が上達していくのが感じられ、それを先生に褒めていただけたのが嬉しくて、時間があればいつも練習をしていました。みんなからは、「百合子さんにはスタジオに行けば会えるよ」と言われるくらい睡眠も食べる時間も惜しまず、ずっとスタジオで練習をしてどんどんバレエにのめりこみ、虜になっていきました。

(Part2)に続く)

*1 芸術選奨 舞踊部門 文部科学大臣賞受賞(文化庁による受賞理由): ヒューストン・バレエ・プリンシパルとして国際的に活躍。令和2年は日本バレエ協会公演『海賊』に主演し、磨き抜かれた高い技術と深い洞察力、華やかな存在感をもって圧倒的な舞台を見せた。またウェブ発信を通して、コロナ禍で苦境にある日本人アーティストの支援活動を実行、賛同者は世界的に拡大している。海外を拠点に研鑽(けんさん)を積み続け、様々な形で日本バレエ界に貢献する加治屋百合子氏の活動は社会的影響力も大きく、高く評価されるものである。